

古典解釈について

土 井 忠 生

今日は講話という題が与えられておりますけれども、講話ではなくて、狙上にのぼされている私自身の身上話をいたすのでございます。四か月あまりでこの学園を去る運命にある者ですから、あまり弱音をはくのもどうかと思えますけれども、わたくしは、わたくしなりの生き方をしてまいったので、やはり一応わたくしを理解していただくことが、わたくしのためにお書きくださった方々に対してもいくらか役立つかと思つて、できるだけ短い時間でお話ししておきたいと思つて、わたくしは、本来、才能を持たない、これといつて才能のない者です。だから、何とかして一人前になりたいと努力してまいりました。これという特長がないものですから、それとにかかろあがいてみる。いろいろやってみて、そして、何とか、あるレベルに達することができたらというふうないき方をしてきた者であります。したがって、主体性を持たない者として、いわば、客観的な方法に頼らざるをえない。学問のしかたといたしましても、客観的な実証という方へ向かわな

くては何ともならないわけであります。

わたくし自身が、元来そういう者であるのに加えまして、たまたまわたくしが学びましたのが広島の高師範学校でありました。気のきいた東京の高師範・茗溪派の人々とは違って、広島尙志の連中は気がきかないけれど、読む力は持つておる、と言われた大正時代に広島の高師範で学びました。そして、ある程度そういう方面で基盤と申しますか方向づけをしてもらった上で、京都へまいりました。京都大学が、また、いわゆる京都学派と言われているような実証的な研究をしている所でした。文学部の先生方にもいわゆる老先生などもおいでになり、全般の学風というものがそういうものでありますし、直接教えを受けた先生方も、そういう点で一家をなしておられました。そういうわたくしの身に合った指導が、わたくしをしてますますわたくしなりに進ませるということになったと思つてます。

そこで、いわゆる国語学を勉強するのに、これといつて特長のない者が、あるレベルに達しようとするならば、とに

かく今申しましたように、努力するより他はない。しかも気のきいたことをやろうとすると、それはできない。平凡なことを始めからやりなおしてみると、というふうないき方で、とにかく何でもかでも一応考えてみる、というふうな努力をしようとしたわけです。

したがって、例えば、さきほど話題になりました「御局は桐壺なり。」という文が出てきます。これは主語があつてすぐに述語があり、しかも、その述語が前後にあるような用言中心の長い言い方ではなくて、体言中心の短い言い方です。一語一語としては、変哲もないものですけれど、どうしてこう、前後の長い文章、主語のたいして出ていないような文章の間に、ああいふ言い方がされるのか、ずばりと言い切っているあの言い方が、なぜあそこにしているのか、ということを考える。そうすると、それは、「あの皇居でも隅つこの、遠くにある部屋なのだ。」ということが、あの表現そのものから受けとれるのではないかということになる。そういうきわめてありふれたことを一応問題にする。したがって、ずいぶん無駄をするわけです。早く結論に達するとか、気のきいたことを言おうとかするのではなくて、とにかく無駄でも一つ一つコッソツとやっていく、ということを担当長い期間をかけてやって来ました。

そうしているうちに、ぼつぼつ、普通の注釈書あたりでは見逃がしているようなことでも、今までにすでにわかつてい

たようなことばでも、今でもすぐ使うようなことばづかいだけれど、どうもこれはひっかかりがありそうだというふうなことが、次第々々にわかつてきたように思ふのであります。

したがって、三十年もやっていて、甚だ気のきかないことなのですから、わたくしなりに、まあ無茶苦茶にやっていたのから、次第に多少その価値、やった結果の価値がわかりかけてきました。やり方に対する重点のおきどころが多少わかつてくると、何だかやり方が立体的な方法へというふうに進んで来たかと思ひます。平面的ではなくて、多少もの、幅あるいは奥行きがわかりかけたのが、甚だお恥づかしいことですけれども、やはり六十に達するころからです。近ごろ、そういうことが多少わかりかけたのではないかと思ふのであります。

今は、お暇をいただきましたら、勉強しなす、六十の手習いをやるつもりで、それを楽しみにしているわけでありま

す。大学での演習に、なぜ「源氏物語」を飽きもしないで続けたかということなのですが、京都大学で卒業論文を書く時に、吉沢先生にご相談いたしましたところ、先生から、ひとつこういうものをやったらどうかと言って、題を与えていただきました。そして、平安朝のものをひとつと見ました。平安朝の作品、それは、大体文学作品を中心といたしまして、そ

れを主としたのですけれども、その他の言語作品にもひととおりの眼を通しました。そして、今日と違ひまして、カードを使うような気のきいた方法でありませんでしたけれど、ひととおりの眼にふれた用例をすべて書き抜くということをやりました。その結果を見渡してみました場合に、平安朝の作品で、平安朝語が最もよく平安朝的特徴をもって使われているのは何かという点、やはり「源氏物語」という結論に達したわけです。そこで、このすぐれた「源氏物語」を研究してみようと思ふようになります。これはもちろん言語面から見るのでして、あくまでも言語の立場からものを見ていこうとする専門的な学徒といたしまして、自分としてできるだけ追求してみたいと思ひました。

そして同時に、教育の面も考えました。やっただけの労力に応じて効果があると期待しうるものをやるのが、教育的にもいいのではないかと思ひました。教育される方から申しますと、本格的なあるいは中心的なものへぶつかって行く。そうすることにやります。次第にほんとうのことがわかっていく。価値の上から申しまして、隅っこにころがっているようなものを、いくら時間をかけ、労力を費してやっただけで、こちらがその価値を見ぬくだけの力を持っていなければ、報いられるものはわりに少ないものです。大学において学ぶという筋道におきましては、できるだけ大物にぶつかるとして、それと四つに組む。そうすることによって力が養われ

ていくのではないかと考えました。

それから、地方の大学でやるのに、いわゆる都会の、あるいはその時の流行、新しい行き方、それを追うことはまずい。むしろ、地方は地方でやれることをやるべきだと考えます。

わたくしが大学を卒業し、文理大の教壇に立ちました頃においてもいわゆる文献学派的な一つの新しい行き方が出てまいりまして、学生諸君も大いにそれに心をひかれ、それそれ努めていたわけであります。そういう研究をするのに便宜の多い、新しいやり方をするのに都合のよい、都会の者と、そうした境遇にない者とは、結局、肩を並べてやるとか、それを追い越すとかいうことはおぼつかしいことなのです。

それに反しまして、そういう新しさに引っぱられたり、周辺から押されたりするようなわずらわしさのなくて、自分なりにやれるのは地方の者であります。それが地方の者の特権であります。そうした立場において、ありふれたもの、どこでも手にはいるものを取りあげて、じっくりとやる。そして、性急に、気のきいたことを早く発表して、何とか世間の者をおとすと言わせようというような欲望を捨てて、世間からは、あるいは学界からは、忘れられてもいいから、じっくりとやって、自分自身を養っていくというふうなことこそ、日本の学問を興す道ではないかと思ひました。

ほんとうの学問が、政治上の中心である都会・首府ではなく

て、それ以外の所で、地方の田舎で、興っているのが、ヨーロッパ・アメリカの実情です。学問の世界は幅が広く、また底が深く、政治、経済あるいは一般の文化の進みと一つにならなくてはならないというわけのものだけではなくて、それらの根底に立つべきものもあるかと考えます。それは、世間の動きに必ずしもひきずられないで進められるものではないかと思ひます。そうしますと、いろいろ新しい文献資料を追うというふうなことをしなくても、地方に居て容易に手にすることのできる、ありふれたテキストでも、これをわれわれがじっくり見るといふことで、本当の基本的な学問はできるのではないかと考えました。

それから、また、教育的には、いわゆる秀才とか優秀な学者とかの養成というよりは、全体的なレベルを高めるということ、言いかえれば、どんな凡才でも努力次第ではやれることを考えなければならぬと思ひました。わたくし自身がいかに、そういういき方をしているものですから、そういうような全体のレベルが高まるような一般的な方法、したがって、それは、ある特定の人でなくてはやれないというのではなくて、だれでも努力すればできる方法、すなわち、さきに申しましたような、できるだけ客観的な方法をとるといふことによつてやれるのではないかと思ひまして、そういうことを心がけようとしたわけでありました。

今日の、特に戦後の大学というのは、突然変異と申しますか、急激な変化によりまして、そういうようなゆっくりとし

た状態ではとり残されそうだという面もあります。そのためにどこかに、何か違った文献はないか、新しい資料はないかという点に関心が高まり、また、全体的に見たら小さいこと、隅っこにころがっているようなことも掘り出して、新しいことを言わなければ気がすまないといったような気風が学界にも起こっているように見えます。が、しかし、これは、日本の学問のためには必ずしも喜ばしいことではないのであります。

そういう際におきまして、どこかに、そういう流行に引きずられなくて、どこかで、そういうものに引きずられなくて、自分なりにどっしりと構えたものがないかと、日本のほんとうの学問の進歩は期待しにくいのではないでしようか。それその大学の存在価値は、田舎も都会も同じではなくて、田舎は田舎なりの使命があるわけでありました。そういう意味におきましては、その地方の埋もれた資料をとり出して来て、それを紹介するといふことは、もちろん大切であります。が、それだけに追われていたのでは、阨んとうの学問にはなりにくいのではないかと、ということをおぼろげに感ずるのであります。

ところが、そう言うわたくし自身が、「源氏物語」あたりにずうっと閉じこもっているのではなくて、実はいわゆる新資料にとりついてきた一面を持っていて、いわば、二面的な生活をしているわけでありました。いわゆるキリシタン物といふようなものにも手を出しているのであります。これはま

た、だれでもが手に入れうるような資料ではなくて、外国に行つて、世界でここにしかないというふうな唯一の写本などを見つけ出してきて、それをあれこれとあげつらうわけです。一方では、平凡なものにとりつかなければどうにもならないと言いながら、一方では、きわめて得にくいようなものを取りあげて、あれこれと言う、これは、甚だ矛盾したことをしてきてたのであります。

が、もう一つ掘り下げて申しますと、それも、わたくしが主体性を持たないことから来るのでして、わたくしは自分のおかれた境遇に応じた生活をするより他ない、と思つたからであります。

と申しますのは、文理大ができるのにさきだちまして、外国へ留学する機が与えられました。国語学をやるというのに留学したら、という話になりました。行くのなら早く行った方がいいと思ひまして、二十代の末に出かけたわけであります。留学にもいろいろなやり方がありますけれども、わたくしは留学させてもらうからには、それに報いるだけの仕事はすべきだ、と思つていました。

たまたま、わたくしは京都大学におきまして新村先生の講義に列してあり、キリシタン資料に対するある程度の知識を持つていました。そのことから、せ、かく行くのだから、国語学関係の資料をまず持つて帰ろうと考えました。持つて帰つたら、せ、かく持つて帰つたのだから、これを何とかしなければ、新村先生の恩顧にも報いられないし、学界にも報いられない

いというので、訳のわからないようなことばと取り組んだのです。それは、平安朝の日本語とはおよそ縁もない外国語であります。普通に我々が学校の課程で学んだものとも違ふ、特殊な外国語ととりくんだりして、四苦八苦しました。研究といつても、なかなかまとまったものにはななかつたのであります。やはり、いわゆる境遇に順応するという、主体性の甚だ少ないわたくしといたしまして、それもやるということになつたわけであります。わたくし自身といたしまして、できるからやるというのではなくて、そういうような境遇から、一つの使命と考へて、相反するものを同時にやつた、というわけであります。

しかし、さきに申しあげましたように、「源氏物語」を年々歳々、時には、いろいろな事情でほかの物に移つたりもいたしましけれども、結局始めから今日に至るまで、やはり「源氏物語」を続けていくわけであります。わたくし自身としては、「源氏物語」を解釈するのにも、ポルトガル語などへ首をつっこんで、わからないものに苦しんだことが無駄ではなくて、あの苦しみの段階をへて、「源氏物語」の解釈も少し進んだように思ひます。これは、やはり、わけのわからないものをとにかく無茶苦茶にやってみたということが、「源氏物語」を見る目にも影響するところがあつたように思われます。

そして、戦後におきましては、一度、キリシタン物に頭をつっこんだということから、再度外国へ出かけることになりました。そうなると、ますますせ、かくの好意を無駄にして

はいけないと思つて、いわゆる資料あさりをいたしました。そうした時におきまして、いろいろの、外国における同学の人と交渉を試みてみますと、どうしても、日本人としてこれだけのことはやっていかなければ、その道に貢献しえないと思わせられました。ここでいわゆる日本人としての自覚から、外国人のできない日本語の面をやらなければならぬと思ひました。

そうした場合に、一方で、平安朝のものに立ちむかつて、いわば日本的な、比較的純粋な日本的なものに頭をつっこんで、それだけをつついていたんでは、どうも一人よがりになりそうな気がいたしました。ところでキリシタン物のような外国人が日本語を見たもの、とらわれない立場から、必ずしも学問的ではないが、宗教家としての熱情をこめてできるだけのことをやっている、そういうものを手がけてみますと、いわば、ある一面だけにとらわれないような立場の広さと申しますか、そういう面のあることがわかつてきました。これが、始め平安朝のものをやろうとして出発したわたくしに、いわゆる平安朝専門だけでいくのに比べて、多少異なつた、わたくしなものものを加えてくれたのではないかと思つてあります。

けれども、わたくしに、そういう相反するいき方をするところが、どうして調和統一できるか。そこになりますと、単なる方法とか考え方とかいうものではなくて、人間的にそれを

統べる以外に道はありません。もともと才というものに恵まれていないものですから、私自身をきたえて、人間を造るということ以外には何も無い。いわゆる学問というものの体系を華やかに大きく作り出すというのではなく、ただこつこつと実践するということしかない。やはり自分というものを一歩々々まじめに築きあげていくより他はないわけでした、そういうことに努力しなければならぬ、と心がけたのであります。けれども、なかなか事は志どおりに参りませんできて、かくあるべしという、わたくし自身の言語生活さえ、「源氏物語」を解釈する場合にいろいろと考えることの何十分の一か何百分の一かしか実行できない、ということに焦躁あるいは恥ずかしさを覚えるのであります。ただ、この心持だけは一生忘れたいと思つている次第であります。

わたくしの思つていたことは、わたくしの無力のためになかなか実現しませんでした。この広島大学がいわゆる地方大学の一つとして、広島における大学としての存在意義があり他の大学とは違つて性格を持つべきであります。それはひとり出てくるものではありません。先ずは、教室の各講座のひとりひとりの先生方の努力を中心として、徐々に築かれていくものであります。やがて、この教室から去ろうとするわたくしどいたしましては、この教室のあとを継いでやっていただく方はもちろん、卒業なさつた方々、これから學んで

いかれる方々に、そういう点で心を一にして、何か広島でなければならぬものを築きあげていくことにご協力を願えるならば、何よりしあわせであると思う次第であります。

甚だ勝手なことを申しましたけれども、これも、やがて皆様とお別れする時の近いことを思い、その意味をもって言わせていただきましたことを、ご諒承ねがいます。

(昭和三十七年十一月十一日に行なわれた広島大学国語国文学会における講話の録音による。)

付記

「凡庸の道」は、昭和三十八年二月二十三日(土)、文学部大講義室でなされた、先生の広島大学における最終講義の録音を譌字したものです。なお二、三の聴講者のノートをも参照して不備を補いました。「古典解釈について」は、その前年十一月十一日(日)、広島大学国語国文学会における講話の録音を、同じく譌字したものであります。

「古典解釈について」の初頭に近く「わたくしのためにお書きくださった方々」とありますのは、本誌に収録してある、先生に関する門下生の回想記をさしていられるわけです。

おわりに、右二篇の掲載を御快諾くださった先生に心から謝意を表します。

(清水文雄)